



# 双塔

カトリック新潟教会

2019年5月  
No. 372

---

## 聖霊が花開く場である教会

主任司祭 ラウール・バラデス

当教会では、江部神父様がいらっしゃるときから毎月、第二土曜日に信仰養成講座が開かれています。数年前からその講座に「知っているつもり?! 典礼のしるし、ことば、動作」と名付け、続けて来ました。

今は「聖ヒッポリュトスの使徒伝承」[1]を読みながら、初代教会の典礼と信仰に基づいた生活を学んでいます。当時の教会は今の教会とよく似た環境に置かれおり、多くの試練と混乱のうちにも、与えられた使命を社会の中で実現していました。古代、信仰を生きた人々から現代に生きるわたしたちはヒントをもらえと思っています。

数ヵ月前の講座の、「使徒伝承」の「祈るべき時」の部分に目をとめました。こう記されています。

信者は目覚めて起きると、仕事を始める前にまず神に祈る。祈ってから、はじめて仕事にとりかかる。(神の)ことばの教話(カテケージス)がある場合は、そこに行って魂を鼓舞するために神のことばに耳を傾けることをまず優先させる。熱心に教会に(行くように)努める。そこは霊が花開くところだからである。(35号)

この箇所から、日々の暮らしの中で、毎日の祈りとカテケージスへの参加を優先させることを学べます。しかし、そこに述べられている教会に行く理由が、わたしの関心を呼び起こしました。それは「そこは霊が花開くところだから」とのことでした。この部分の解説には「霊が開く」とはカリスマを指すと解釈できると書いてあります。別の箇所では「聖霊が花開く場である教会」(45号)と書かれて、解説にはここもカリスマについての話と理解できると説明されています。

結局、熱心に遅刻せず教会へ行くように各自が努める理由は、そこは聖霊が花開く場であるからです。各自に神が与えてくださったカリスマ(恵み、賜物、能力、恩寵)は教会を生き生きとされるのです。

考えてみれば、紀元三世前半の教会は決して大きくはなくて、周りはほとんど異教徒で、家族全員が洗礼を受けたわけでもない。礼拝専用の建物もなくて、社会的地位の高い信者は数少なく、経済力も、なんのこの世の力もなかった時代でした。しかし、たった100年後にはローマ帝国が引っくり返るほど強くなりました。一人一人が持っているものを教会で咲かせたので強くなったと言えると思います。

人数も少なく、高齢化が進む中、人材不足、衰退したかに見えるこの教会には当然、「人」が必要ですが、それだけではないと、わたしは上記の箇所を読んだときに強く感じました。人間として、信者として、各自は何かの能力、賜物を十分に持っているはずですが、それぞれのカリスマを教会に持ってきて咲かせることができたら、人数は少なくとも教会共同体は盛んになり、栄えて魅力を持った教会になると思います。

日本語では「カリスマ」は権力、あるいは個性と結びつけるときが多いですが、本来、教会の使い方ではこの語は、正反対の意味で使われます。力ではなく愛の奉仕で、自分を立てるためではなく教会共同体を支えるために各カリスマが与えられる。自分のために取っておくものではない。共有するものです。

しかし、それぞれが持っているカリスマを、謙虚に出し合うためにながら必要でしょうか。それは相互愛だと思えます。聖パウロが愛の賛歌で言うように、愛がなければ鳴るドラのよう、無に等しい、空しいのです。この愛をみことばをとおして教会で学び、信仰の仲間の中で実践し、あかしによって周囲に広める、神からのこの上ない贈り物なのです。

「愛のバラ咲き匂うマリアのみ心、われらのために祈り給え。」

(Cor Mariæ rosis caritátis floridíssimum, ora pro nobis)

---

[1] B・ボットの批判版による初訳、土屋吉正訳、オリエンズ宗教研究所、1987年